



今月は、二代にわたり水車の復元や、宿場町坂梨の町並みづくりにつとめた坂本さん親子をご紹介します。

江戸時代以前から関所があったことで豊後街道の宿場町として栄えてきた坂梨。鉄道の開通とともにその機能が無くなり町は寂しくなっていました。現在、坂梨は地元有志による町おこしで、当時の宿場町を復元した風情ある町へと変わり、来訪者が増えています。そんな坂梨を演出する佇まいに技を発揮したのが大工をしています。坂本義己さん(88歳)、助義さん(56歳)親子です。お二人は、宿

坂本助義さん (坂梨)



場町の町並みづくりに技術面で大いに貢献されています。

父親の義己さんは坂梨の豊かな湧水を利用して農機具として昔利用されていた「水車」の復元や、坂梨の名所を盛り込んだ案内板を製作。また、助義さんは当時の様子を研究し、常夜灯や戸ごとの看板などを作っています。その取り組みと、地元有志「坂梨宿場会」の皆さんによる歴史の掘り起こし活動、遺産の保護、ホームペーJ開設、そして地域あげての美化活動などが一つにまとまり、今の見事な坂梨の町並みが作り出されています。

昔坂梨に7基ほどあったという水車の復元に義己さんが取り組んだのは、平成12年。水車(坂梨桜町公園に設置)の精巧な出来栄えに、その後、一の宮町インフォメーションセンター(阿蘇神社前)に三連水車を、最近では古城地区にも作られ、その技は阿蘇の湧水を美しく表現する空間づくりに役立っています。

3メートルを超える水車を製作 南国のモニュメントに！

助義さんは、先月、3メートル30センチの巨大水車を完成させました。この水車は、沖縄県那覇市の首里城の側に現在建設中の大型公園のモニュメントとして製作依頼があったもので、沖縄では珍しい水車での米搗きの様子を再現する水車小屋付きの大仕事です。製作には3ヶ月が費やされ、阿蘇で作り上げたものを解体し、沖縄に搬送。現地を組み立てるといふ工程で行われました。人の背丈の2倍はある水車の



▲大型公園に設置された3.3mの水車
(写真は建設中のものです)



▲水車横の米搗き小屋内の様子

製作にあたり助義さんは「仕事の話が来た時、樹齢100年以上のヒノキで作るなど様々な条件に請けようか迷いましたが、現地での作業が完了し、沖縄の人たちが感動された光景を見て頑張ったよかったです。作業ではベアリングに最も気を使い、歯車の刃も一つ一つはめ込むなど昔のままを再現して作り上げました」と作業を振り返られます。

最近、古民家など昔のものが人気を集める時代。先人の「ものづくり」の技が機械化された社会の中で見直されています。今後、このような地域の魅力を引き出す町並みづくりが楽しみです。



▲桜町公園



▲坂梨宿場街道案内板

通りに連なる常夜灯

